

## 『ひとりの信仰者として』ヨハネ1:1-4

14:1 「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。

14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。

14:3 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。

14:4 わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」

## ●序論

今月19日のイギリスのエリザベス女王の葬儀をテレビで見ました。

葬儀から埋葬に至る一日。そのプログラムについて、そこには女王ご本人がそこでささげられる賛美とプログラム。朗読される聖書箇所のひとつひとつを指定し準備しておられたとお聞きしました。

今日、その聖書箇所の一部ヨハネ14:1-4を取り上げて、今日のテーマを掲げています。だれも主の前には「ひとりの信仰者として」立つのだということを思いつつ。

## ●本論

## I. 備える人の信仰と幸い

4:1 「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。

今回、その葬儀は規模も見た目もまったくグレードが異なるものの、集約するとまさにキリスト教の葬儀、そしてひとりのキリスト者の葬儀そのものでした。

その葬儀の中心にあったのは、神への礼拝であったということです。

そしてそこでは、賛美と聖書の御言葉があふれ、それらを通して福音の言葉がはっきりとあらわされた神ご自身に栄光を帰するものでした。

そのありさまは、これまでの国際的な行事では、まったく目にしたことの無い印象を持つものです。ひとりのクリスチャンがその様子をこう表現していました。

19日、ロンドンで、エリザベス女王2世の国葬が行われた。500人の世界の国家元首や首脳たちが、バスに乗り合わせて教会に到着し、一般人と同じように教会の椅子に並んで座っている。

その前で、聖書のみことばが次々と語られ、イエスの十字架と復活による贖いで天に行くという福音が明確に宣言された。・・・

神の前に全世界がへりくだる時のありさまを思わせられる出来事であった。

この葬儀は何より神への礼拝とか中心であった。冒頭の司祭による祈りの一節。

憐れみ深い父、私たちの主、よみがえりであり、いのちである主イエス・キリスト。イエスを信じる者は、死んでも生きるのです。

私たちはあなたをしたい求めます。父なる主よ。私たちを罪による死から、義なる命へとよみがえらせてください。私たちがこの世から去る時、主（イエス）にあって休むことができますように。私たちの姉妹（女王）がその希望を置いていたように、私たちも、終わりの時のよみがえりの時に、あなたの目に

受け入れられ、祝福を受けることができますように。

女王を「陛下」ではなく「姉妹」と呼ぶ不思議さえ、祝福されたあたりまえでした。

そしてお気づきのように、この祈りは参列する会衆への祝福の祈りでした。

女王が抱いたような、聖書的希望に生きることができるようにと、冒頭からとりなしの祈りとなっていたのです。

イエスさまの十字架前の告別メッセージの一節に目を向けます。そこには、十字架を語り、弟子の裏切りを語るイエスさまに不安を覚えている弟子たちの姿がありました。

そんな中、イエスさまは希望と慰めを語り始められたのです。

14:1 「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

## II. 信じている人の幸い

エリザベス女王自身は完全無欠な存在ではなく、さまざまな失敗もあったでしょうし、誤解や非難を設けてきたいいた人であったと思います。

そんな中で、彼女がひとりの信仰者として神の赦しの福音の中に生きてきた人であったことは、いくつかの彼女のスピーチでうかがい知ることができます。

2002年、その年女王はールデン ジュビリー（女王在位 50 周年）を祝った喜ばしい年であったと同時に。その同じ年に母親と妹を数週間以内に亡くす悲しみにもあった年でした。その中でクリスマスのスピーチをあらわしました。その一節です。

良い時も悪い時も自分を導いてくれるのは、自分自身が信仰にどれだけ依存しているかを知っています。それゆえ毎日が新しい始まりです。自分の人生を生きる唯一の方法は、正しいことをしようとする事、長い目で見ること、その日がもたらすすべてのことに最善を尽くすこと、そして神に信頼を寄せることです。

信仰によってインスピレーションを得ている他の人たちと同じように、私もまたキリスト教の福音にある希望のメッセージから力を得ています。

今日の聖書箇所 14:1 「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

不安を覚える弟子たちに、約束を与え希望を示しています。

14:2 わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。

14:3 そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。

「終活」…一般には、自分の来たるべき「死」に備えて、自分の身辺整理する…というような意味で理解されている、クリスチャンにとって、これとは一味違いがあります。

かつて4回にわたって持った終活セミナー。

それを開催する上での願いは、聖書的希望の再確認でした。

人が考えることも、目を向けることも怖いと言われる「死」という現実に聖書的な希望があることを自分自身が再確認していくことです。

聖書に見るならば「死」というものが希望の入り口としてわかります。

- 死は雨漏りのする狭くて古い家から、広くて快適な家に引っ越しするようなものです。
- 「古い家」とは、私たちの今のからだを意味します。長年使用していると古くなってあちこちが傷んできます。では「新しい家」とは何かと言いますと、死後にキリストによって備えられる復活の身体のことです。にわかには信じられないと思いますが、聖書は信じる者に、死後の新しい身体への復活を教えます。つまり死とは古い家から新しい家に引っ越しをする際の過程です。
- 引っ越しの時には、古いものを整理したり、重いものを運んだりして苦勞します。そのように人が死ぬ時には病気になったりもして、時には苦痛が伴います。しかし新しい家での快適な生活が始まれば、引っ越しの時の苦勞を忘れてしまうように、新しい身体での生活が始まれば、死ぬ時の苦勞や苦痛を人は覚えてはいないものなのです。確かに死ぬことは怖いけれど、それは引っ越しの際の苦勞のような一時的な苦しみにあって、その向こうには永遠の平安と安息があるということをキリスト教は説くのです。

アーメン。イエスさまがわたしたちに「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と言われた言葉が分かってくるのではないでしょうか。

### Ⅲ. 約束に生きることの幸い

先の女王の葬儀でもう一つ印象深いことは、その葬儀で女王を主のもとへ送り出す人に、神さまへの信頼があったということです。

だから、そのすべてゆだねることができる。信頼して礼拝とすることができるのです。

14:3 そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。

イエスさまは、わたしたちを迎える備えをして再び来られることを約束してくださいました。これは全世界のクリスチャンが等しく持つ希望の言葉です。

そしてイエスさまは、言われました。

14:4 わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」。

弟子のひとりトマスは、それに対して、どうしてその道がわかるのか？ つまりあなたの約束にあずかる道がわかるのか？と尋ねています。

14:6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。

だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。

言い換えるとイエスさまに目を向けて信じて生きることこそ、その道なのです。

そうしてまっすぐ歩み、いのちの希望にあずかることができる。それこそが祝福の約束です。

### ●最後に、

先日も紹介した福音雑誌に一人の信仰者のかたの証しがありました。イラストレーターのクリバリユミコさんと言われる方で、2010年3月に次女出産後32歳の若さで

天に召された方です。

発病してその病の深刻さ死の恐怖に押しつぶされそうになる中で、彼女は一人の方に導かれて教会に行くようになり、そこでうながされるままに、「イエスさまがわたしの罪のために十字架にかかって…」と牧師について祈り始めた時、そこで神さまに触れられる経験をしました。「わたしが求めていたのはこれだったんだ」と自分の魂の叫びが聞こえてきたと言います。彼女は救われたのです。

その後一旦は、回復したかのように見えたのですが、七年後再発が分かり、そこでも癒されるように祈ってきたと言います。ショックだったと言います。でも彼女はこう話していたというのです。

「しかし、『やはり神さまはいない』とは思いませんでした。神さまは再発することも知った上で死にゆくわたしを救ってくださいました。自分はイエス・キリストが命に代えて愛しぬいた女なのだ、と思ったのです」と。

そしてこう語ったそうです。

「イエス・キリストの十字架の死と復活がリアルで仕方がない。

これまで今日でしかなかった死というものが、永遠のいのちを得るためのプレゼントのように思えるのです」と。

ふつうなら、ただの不幸としか思えないことにさえ、キリストを信じることで新しい見方ができるようになったとありました。

キリストの救い、キリストの復活の命は、わたしたちに死んで終わらない永遠の希望を語ります。永遠の世界軸でわたしたちは、地上での生涯を与えられているのです。

そうしてキリストを信じて生きる証し人は、それぞれの人生の中でその祝福と感謝を証しすることができるのです。

日本語訳はありませんが、エリザベス女王の自伝序文でこう記してあります。

「私はこれまでもまた今も、皆さんと皆さんの祈り、そして神の揺るぎない愛に心から感謝しています。私は確かに、神の誠実さを目の当たりにしてきました」。

「主は良いお方」とわたしたちは賛美します。ひとりひとりが信仰者として、主に信頼し、より頼み、従って人生を歩むとき、主の真実に目が開かれるのです。

女王は、その葬儀の中でひとりの信仰者として証しされ、また葬られました。

その埋葬式の最後に、地上での王権を象徴する王冠、宝玉、王杖（おうじょう）が、女王の棺の上から下ろされる儀式も行われました。

葬儀で読み上げられた聖書のことばはこうでした。

私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。（第一テモテ6：7）

だからただ神を信じ、キリストを信じて生き抜くことです。そうすることで、わたしたちもまた主のもとにひとりの信仰者として帰ることができます。

14:1「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」